

マルコによる福音書 11 章 20 節～33 節

2017 年 10 月 26 日

古本 靖久

1、聖歌 465 番 「しずけき川の岸辺を」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 84 ページ）

4、テキストの位置

前回の場面で、イエス様は実をつけていないいちじくの木に呪いの言葉をかけました。いちじくの木はイスラエルの象徴でした。

いちじくの木を呪う

ということは、いつまでも信仰の実をつけようとしないイスラエルに対する批判でした。

エルサレムにて	日曜日	11:1-6	神が備えたもの
		11:7-11	群衆の歓喜とイエスの沈黙
	月曜日	11:12-14	いちじくの木
		11:15-19	神殿とは
	火曜日	11:20-26	信仰と祈り
		11:27-33	神からの権威
		12:1-12	ぶどう園と農夫のたとえ
		12:13-17	神のものは神へ

次の日になって、いちじくの木に変化が見られます。そして場面はユダヤ教指導者たちとの問答へと続いていきます。十字架を目前にして、イエス様はわたしたちに何を語られるのでしょうか。

5、節ごとに

◆信仰と祈り

11:20 （そして）翌朝早く、一行（彼ら）は通りがかりに、あのいちじくの木が根元から枯れているのを見た。

マタイ福音書ではイエス様が呪った直後に木は枯れますが、マルコでは次の日の出来事になっています。その間に神殿での出来事が挟まれており、マルコは意図的に枯れたいちじくの木とやがて崩壊する神殿とを結びつけます。

11:21 そこで、ペトロは思い出してイエス（彼）に言った。「先生、御覧ください。あなたが呪われたいちじくの木が、枯れています。」

このときには、ペトロたちにはなぜいちじくの木が枯れたのか、理解できていなかったことでしょう。しかし後世の人たちは、この出来事と紀元 70 年に起こったエルサレム神殿の崩壊とを重ねていたかもしれません。

そしてエルサレム神殿の崩壊によって、神さまの恵みはすべての人に向けられていきます。ここでこの箇所が終わっていたら、いちじくの木の話はイスラエルに対する批判でしかありませんでした。しかしイエス様は突然、話を切り替えていきます。

11:22 そこで（そして）、イエスは（答えて彼らに）言われた。「神を（への）信（頼を持ち）なさい。

新共同訳聖書だけでは、イエス様はペトロだけに答えたように受け取れます。しかし実際は「彼らに」という言葉が含まれています。他の弟子たちや周りにいた群衆にも、イエス様は語られています。そしてその言葉は、今を生きるわたしたちにも届けられています。

イエス様が命じられていることは、「神の信頼を持つこと」です。神の信頼とは、神さまが自ら持つほどの強い確信です。自分の力では到底持つことができないほどの信仰ですが、神さまは必ずその信仰を与えてくださるという強い信頼の上に立つのです。

11:23 はっきり言うておく（アーメン、わたしはあなたたちに言う）。だれでもこの山に向かい、『立ち上が（動い）て、海に飛び込め』と言い、少しも（心で）疑わず、自分の言うとおりになると信じるならば、（その者には）そのとおりになる（だろう）。

イエス様は時折、極端な比喩を用いて語ります。「らくだが針の穴を通る」もそうでした。しかしここで言いたいことは、「素直に信じる」ということです。すべてを神さまに期待するときに、すべてが約束されているということではないでしょうか。

また「疑う」と訳されたギリシア語ですが、「ひるむ」や「躊躇する」といった意味もあります。湖の上を歩こうとしたペトロは、波に怯え、ひるみ、躊躇したときに、水の中に沈んでしまいました。そのときにイエス様は言われました。「なぜ疑ったのか」と。

信仰とは、疑わないことです。二心を持たずに、ひたすら神さまにより頼むことで、不可能が可能になると言われるのです。

11:24 だから、(わたしはあなたたちに) 言うておく。(あなたたちが) 祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。そうすれば、(あなたたちには) そのとおりになる(だろう)。

聖書の他の箇所にもこのようにあります。

あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。(ヨハ 16:23)
あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。(マタ 6:8)

祈りは必ず聞かれる。その確信を持つようにと、イエス様はしつこい程に、繰り返し伝えられます。

11:25 また(そして)、立って祈るとき(は)、(もしも)だれかに対して何か恨みに思うことがあれば、赦してあげなさい。そうすれば、(天にいる)あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちを赦してくださる(だろう)。」

原文では「恨みに思うこと」に限られてはいません。隣人に対して「何か」あれば、と書いています。「何か」とは、争いごとや貸し借り、弁償させる必要のあるものなど様々です。

それらに対する赦しが、祈りの前提として必要なのです。神さまに赦され、神さまとの正しい関係に入ろうとするためには、まず隣人と正しい関係にあることが必要なのです。隣人との関係が無視されたまま、神さまと正しい関係になることはできないのです。

次の 26 節の部分には、✦マークがついています。これは新共同訳聖書が底本としている原文にその節が欠けていることを示します。多分後代に加筆された 26 節にはこうあります。

もし赦さないなら、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちをお赦しにならない。

<前半の箇所から>

いちじくの木にたとえられたイスラエルの象徴である神殿は崩壊し、本来の機能を失います。しかし信仰と祈りによって、すべての人たちは神さまに向かうことができます。

一方、答えられない祈りがあると感じるのも事実で、初期のキリスト教会は祈りにいくつかの条件を導入します。イエス様の名によること。祈りの内容にイエス様の言葉が宿っていること。祈りにおいて複数の人と一体になること。二心から出たものではないもの。個人的な願望ではないこと、などなど。

しかしイエス様は、祈りの方法を提示してはいません。言われているのは、きわめて単純なことです。「信じて祈れ」、「他者を赦して祈れ」、「時間を作って祈れ」。

◆神からの権威

11:27 (そして) 一行(彼ら)はまたエルサレムに来た(る)。(そして) イエス(彼)が神殿の境内を歩いておられると、(彼の元へ) 祭司長、律法学者、長老たちがやって来て、

前日に神殿で騒ぎを起こしておいて、次の日に平然と境内を歩くイエス様たち。普通に考えるとありえないように思います。、過越祭にはユダヤ人男性すべてがエルサレム神殿に行かなければならなかったもので、境内には多くの人がいたとしてもです。

祭司長、律法学者、長老たちという、最高法院(サンヘドリン)を構成する人たちが、イエス様の行動を知らないはずはありません。イエス様に関する様々な伝承が別々に伝えられ、それが並び変えられただけなのかもしれません。

11:28 (そして彼に) 言った。「(あなたは) 何ゆ(どのような) 権威で、このようなことをしているのか。だれが、そゆ(これらのことを) する権威を与えたのか。」

「このようなこと」とは何でしょうか。聖書の順番通りだと、神殿で暴れた出来事になります。しかし順番が関係ないなら、これまでのイエス様の様々な行為を指すことも可能です。中風の治癒物語(2:1~12)など、権威という言葉がぴったりくる箇所もあります。

権威というと、なにか偉そうな印象を持つかもしれません。しかしその意味は「自発的に同意・服従を促すような能力や関係のこと。威嚇や武力によって強制的に同意・服従させる能力・関係である権力とは区別される」とあります。真に権威のある人の前に出ると、ただ跪くしかない状態になるのです。彼らはその権威の源を探るのです。

11:29 (そこで) イエスは(彼らに) 言われた。「では、(あなたたちに) 一つ(のことを) 尋ねるから、それ(わたし) に答えなさい。そうしたら、何ゆ(どのような) 権威で(わたしが) このようなことをするのか、あなたたちに言おう。

イエス様は逆に彼らに尋ねます。聞かれたことに素直に答えないのは、いつものことです。

イエス様はカファルナウムで安息日に会堂に入り、律法学者のようにではなく、権威ある者として教えられました。また汚れた霊に取りつかれた男をいやしたときに、それを見た人々は「権威ある新しい教えだ」と言って賞賛しました。さらに中風の人をいやす場面では、「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」とイエス様は言います。今やマルコ福音書の読者は、イエス様の権威は神さまからのものだと知っているのです。

11:30 ヨハネの洗礼は天からのものだ(であ)ったか、それとも、人からのものだったか。
(わたしに) 答えなさい。」

ユダヤ教の最高法院の人たちに、イエス様はヨハネの洗礼について尋ねます。「天から」という言葉は、「神から」と同じ意味を持ちます。ユダヤ教の人たちは「神の名をみだりに唱えるな」という戒めを守り、神という語を極力用いないようにします。ユダヤ人が多くいた所で書かれたマタイ福音書を見ても、その傾向はよくわかります。



洗礼者ヨハネは、預言者として天(神)から遣わされた者だったのか、それとも普通の人なのに、勝手に預言者のように行動していたのか。29、30 節には「わたしに答えなさい」というイエス様の命令が二度繰り返されています。

11:31 (そして) 彼らは(互いに) 論じ合っ(て言っ)た。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と(彼は) 言うだろう。」

天から、つまり神からということになれば、神の預言者の声に従わなかったことになりま
す。それは大きな罪です。

しかしこの場面、普通に考えれば『天からだ』と言えば、『わたしの権威もそうだ』と彼は言うだろう」と続く方が自然です。そう考えることができなかつたのは、彼らの本当の関心はイエス様の権威の源ではなかつたからです。

11:32 しかし、『人からのものだ』と言えば……。」彼らは群衆が怖かつた(を恐れていた)。皆が、ヨハネは本当に預言者だと思っていたからである。

洗礼者ヨハネの宣教活動は神さまに由来していないと言い切ると、群衆がどのような反応をするのか、彼らは恐れしました。

彼らは群衆の前で狼狽をする姿を見せたくなかつたのでしょうか。それとも群衆が本当に怖かつたのでしょうか。このような態度を取ることで、彼らは自分たちの考えを正直に伝えることができなかつたのでした。

11:33 そこで、彼らはイエスに、「分からない（わたしたちは知らない）」と答え（て言っ）た。すると、イエスは（彼らに）言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも（あなたたちに）言うまい。」

宗教指導者たちは、「知らない」と答えます。知らないはずはないのです。しかし彼らを襲った恐れが、「知らない」という状態のままにとどまらせるのです。

聖書を読んでいくと、洗礼者ヨハネは神からのものなのか、またイエス様の権威は神からのものなのか、判断することができるのかもしれませんが。しかしわたしたちに求められているのは、頭で理解することではなく、イエス様を神の子として理屈抜きに受け入れる信仰なのではないでしょうか。

<後半の箇所から>

「何の権威で、このようなことをしているのか」。祭司長、律法学者、長老たちは、イエス様に対してこのように問い詰めます。彼らは、「イエスをどのように殺そうかと諮った」（11:18）と考えていました。つまりイエス様がそこにいるのが邪魔で仕方なかったのです。

権威という言葉は、怖い言葉です。権威がある人は、そのグループの中では自由に何でもできます。神殿の中では、祭司長、律法学者、長老たちに権威が与えられていました。そしてその権威を振りかざしていました。しかしそこにイエスという男がやって来たのです。

わたしたちにも自分の領域が侵されると、その相手を追い出したいくなることはないでしょうか。「何の権利があつて」と敵対心をむき出しにする。そして心の中に入ってきたイエス様に対してさえも、「なぜ来たのですか。わたしの人生です、出て行ってください」と言ってはいませんか。

エルサレム神殿での権威は、宗教指導者たちから奪われました。ではわたしたちの心を支配する権威はどうでしょうか。わたしたちはその権威を自分のものとして握りしめてはいけないのです。

イエス様はわたしたちの心の中に来ようとしておられます。わたしたちに求められていることは、イエス様にすべてを委ね、お任せすることです。イエス様は神様からの権威で、わたしたちを導くために来て下さいました。イエス様を受け入れていくこと。それが神さまのみ心なのではないでしょうか。

今回の学びはこれで終わります。次回は 11 月 29 日(水)10 時 45 分からです。「ぶどう園と農夫のたとえ」（マルコ 12：1～12）について学んでいきます。